

書物を開く時

図書館長

竹内 真彦

人が書物を開くのはどのような時なのでしょう？

しばしば言われるように、先を見通しにくい時代です。「先など見通さなくてよい」と開き直れば多少は楽なのかも知れませんが、それができる人は少数派でしょう。多くの人には「将来どうなるのか？」ということを考えてしまうでしょうし、多くの場合、その将来が「明るい」ものには描けないのだと思います。ともすれば、先は「暗闇だ」としか思えないのかも知れません。

しかし、これは現代に限った話ではありません。歴史を紐解けば、現代の我々よりも悲惨な境遇に置かれた人々は数限りなく存在していました。そのような「暗闇」にあっても、多くの人々は必死に言葉を紡ぎ、それが現代にまで伝えられています。その伝達手段の一つが「書物」であるわけです。換言すれば、書物には暗闇を照らす一条の光が眠っています。

ただし、書物に眠る光は勝手に我々を照らしてはくれません。読者たる我々が見出さなければならぬのです。

この「お薦め本コンテスト」に応募された作品は、書物に眠る光を見出した学生たちの記録とも言えます。これらの作品が道標（みちしるべ）となり、より多くの読者が書物に眠る光に出逢えることを主宰者の一人として願っています。